

日本の近世近代の思想家のこと

「蝶の雑記帳 131」

今年は根をつめる仕事をしているせいで、新しく書物を手にとることが減っている。それでも、ある新聞の書評者一同が推薦書をそれぞれ三冊紹介しているなかに読んでみようと思うのが一冊あったので買って、合間を見つけながら一月かかって読んだ。三か月ぶりのことだ。その本とは、渡辺浩著『日本政治思想史』（東京大学出版会、2010年）である。

予期したのとはちがって、近世近代の思想を批判的に論じる書物ではなかった。江戸期の政治思想を規定した儒学・武士の考え方・「威光」を用いる徳川政治体制の構造・家職国家と立身出世主義・御百姓の対応を整理したうえで、何人かの思想家を採り上げてその思想を歴史記述のように素描するアプローチであった。

くりかえせば、そこでは、江戸期に生まれた思想についての“思想論”というよりも、江戸期の思想の潮流となったいくつかの特徴を採り出したうえで、個々の思想家の考え方を批判を交えずに記述するやり方が取られている。その記述法が、わたしに、日本の社会と文化の歴史の流れのなかで、江戸の時代が人間の思考を規定したのだという見方を浮かび上がらせた。今回はそのことを考えてみたい。

わたしがこの書物を読んで今まで以上に気づいたのは、江戸時代のよく考えて書き物を著した考え深い人たちのほど

んどが、現代から見れば、普遍的な立場に立って物事を多面的に考えることができなかったことである。この書物は政治思想史を主題にしているからでもあるが、採りあげられたその方面の多くの思想家たちの限界があらわである。

荻生徂徠のように評価の高い人でもこの批判をまぬがれない。考証学に関連する哲学的な面で思考が深いとはわたしには思えない。政治面に関しても、百姓^{ひゃくせい}一般はもちろん武士たちも農業生産の現場の土地に帰す最も古い封建制に戻す政策を提言するところに、すぐれた歴史観や現実感覚を見出すことはできない。尊敬する新井白石のような開明的な人さえ時代の制約を受けていたことを苦く思わないわけにいかない。そして、安藤昌益の徹底的な思索にも人間の思考が伴うべき批判・比較考量…などが足りない、と思う。本居宣長たちの国学の狭量さは、それを批判した上田秋成のような人がいたのだけれども、わたしをととても悲観的にさせる。

日本人の思考の狭量さはなぜ生じたのだろうか。日本が島国で海外の文明文化や思想に接触する機会が少なかったことが一つの大きな原因だっただろう、文明文化や思想は、異質な文明文化や思想と出会ってはじめて鍛えられて発展するのだから。しかし、江戸時代の思索者の前には儒学と朱子学があった。江戸時代の武士はもちろんゆとりのある町人たちは、わりあい普遍的な儒学と朱子学を学ぶことができた。

それなのに、荻生徂徠や安藤昌益や本居宣長たちは、その

哲学的な普遍性から学ぶことが少なかったのである。日本では、儒学と朱子学を一体的なものにとらえる見方が強かったからだと考えられる。事实は、宋学～朱子学は、政治・道德の学問だった孔子に始まる儒学を一步進めて、対象も考え方も普遍的なものに開かれていた。ヨーロッパには、人格神のいない朱子学の世界観・人間観が、清の時代の中国にいた宣教師を通して、キリスト教から離脱しようとする啓蒙主義に影響を与えた、と考える人がある。

朱子学を真剣に学んだ人には普遍的に考えようとする態度が埋め込まれたと考えることができる。新井白石はその片鱗を示している人だろう。江戸期の商業の発展は社会を市民社会と呼べるように変質させていった。そういう市民社会で学んだ富永仲基は、儒学と朱子学を客体化して批判的に考えることができるまでになった。そこからさらに仏教という宗教を客体化して、仏教思想の歴史的発展を分析的に論じることまでできた。上田秋成はその市民社会的な潮流の中にいたのだ。わずかに流入した漢語に翻訳されたヨーロッパの書物に触れた山片蟠桃などは、その知識をとりいれて著作をしている。

この書物は政治思想を記述することを主題としているから、広く思想一般を推し進めた人たちを含まないが、江戸期の思想を広くとらえるためには政治思想の外にまで及ぶ見方が必要である。江戸時代晩期の儒学朱子学者佐藤一斎の書

いた『言志四録』には、独創的ではないかもしれないが普遍的で良質な思索が示されている。そういう時代の進展のなかで知識欲に富んだ人たちは朱子学の考え方の普遍性を多かれ少なかれ自分のものとした、と考えることができる。だからしだいに、ヨーロッパ思想の重要な概念を朱子学の用語に結びつけて漢字に表現することができ、さらにその概念を使って思索することができる人たちが輩出することになったのだ。この書物が採りあげる福沢諭吉と中江兆民は、そういう思想家の代表である。

それにしても、現代の視点から観れば、近世の思想家たちの思索があれほど特異な方向へ進んでいったことを驚かすにはおれない。世間でガラパゴス化ということばが使われることがあるが、日本列島がユーラシア大陸の東のはずれにあって、ガラパゴス諸島に異種の生物が来る機会が少なかったのと同様に、大陸の文明文化との交流のなさが一因であるとする考えを排除することはできない。

中国の社会にはかなり合理的に物事を考える人が多かったように思うが、そこで生み出された儒学・朱子学に足りないところがあり、その書物を学んでもそれを発展させる力がうまく働かなかった、とも考えられる。ヨーロッパと比較すれば、思い当たる要素がいくつかある。ギリシアの都市国家では、奴隷を除く市民が基本的に対等な社会で、アジアにくらべて束縛を嫌い独立心に富む傾向があっただろう。そして、

古代ギリシアには、学問と思想の領域で哲学基礎と呼べるような領分があった。代表として論理学とアリストテレスの体系的な理論を挙げることができる。そこでは、世界を考えるのに、自然を対象とする自然学と人間に関係することを対象とする学究をいったん区別する視点がはっきりとあり、さらに宗教にまで至る形而上学があって、異質な領域を区別して論理的に考えようとする姿勢があった。その傾向は広大なローマ帝国に引き継がれてヨーロッパに広まった。西アジアにもその思想は波及したのだが、近世近代になってその差は拡大したのだ。それにくらべて、普遍性へ展開をもたらすことのできる古代ギリシア以来の思想は東アジアに影響力をもつほど伝わらなかった、と言えるだろう。

しかしこれは、現代からふりかえって理解できることである。おくれをとった日本人は、近代になってヨーロッパ思想の学習に大きな前進を見せたが、よく見つめれば、現代の日本人にも江戸期の人々と同じ傾向が残っていて、日本の思想が欧米の思想と競うことができるほど根本的な普遍性を獲得できていないのではないか、とわたしは危惧する。哲学だけでなく人文学や社会科学で、創見と言えるものを含んだ書物が日本に少ないのは、そのせいではないだろうか。

今もなお、和魂洋才ではない態度で、世界中の思想と考え方を学んで日本に住む人間の思考に溶け込ませる必要がある、と思う。その実践の足りなかった者の繰り言はおしまい。

* *

悲観的な気分を変えるために、渡辺浩の著書の最後に採りあげられた中江兆民のことを考えよう。その書物に触発されて、兆民の岩波文庫『一年有半・続一年有半』を書棚から引っ張り出した。精出していることに時間を取られているから、以前読んだとき傍線を引いていた部分だけを読んだ。

傍線を引いた最初の文は、「わが日本 ^{いにしえ}古より今に至るまで哲学なし。本居(宣長) (平田) ^{あつたね}篤胤の徒は古陵を探り、古辞を ^{おさ}修むる一種の考古家に過ぎず。天地性命の理に至っては ^{ほうえん}嘗焉(見えていない)」であった。いきなり、上で考えたことを言っている。兆民は歯切れよく明解に書くから、畏れ入ってしまう。もう一箇所傍線を引いたところがあったが、あとは『続一年有半』の方である。

感心した文章をわずかだが追ってみよう。

A：まず「靈魂」という項に、「精神とは本体ではない、本体より発する作用である、働きである。本体は五尺軀である。この五尺軀の働きが、即ち精神てふ靈妙なる作用である」と述べられる。ここに「莊子は既にこの理を見破っていた」と註釈しているが、作用・働きという語を含むこの文はむしろスピノザの見解に近い。兆民はスピノザを読んだのかもしれない。

B：「未来の裁判」の項に、「人類中の事は人類中でやって

のけ、…、自己脚跟のことは自己の力で料理するようなし…」とある。この世界のことはこの世界で料理するという雄渾で冷静な態度がある。

C：しかし、「世界」の項には、「^{おも}惟ふに今日の世の中の事、必ず目見て耳聴き科学検証を経たるもののみ確実で、余はことごとく不確実だといはば道理の半ば以上は抹殺せねばならぬことになり、極めて偏狭固陋^{ころう}の境^{じかく}に自画せねばならぬ。かつ日常の事、必ずありうべきもの、または必ずあるべからざるものは、皆直ちに人言を信じて、必ずしも検証を施さないで、それで己も許し人も許して、しかして真に確実で動かすべからざるものがいくつもある。かつたとひ科学の検証を経ずとも、道理上必ずあるべき、またあらざるべからざることも、いくつもある」と言っている。歯切れよく断定的に語る兆民にも、たいてい途上にある科学的知識だけに依拠せず、世界のことを考えなければならないとする健全な良識があることが知られる。

D：議論のむずかしい「主観」と「客観」について、「吾人をもってこれを言へば、およそ意象の過半、いなほとんど全数はみな客観的で、しかしてまた主観的である」と言い、「世の中に純然主観的のものも実にすくない、純然客観的なものも実にすくない、万物みな客主あい映じて、両鏡の織翳(わずかなかげり)なきがごとくである」とくりかえし、判断のむずかしさを表白している。

E：「意象」と「無形の意象」の項でも、カントのいう表象・概念さらに観念・理念について考え、認識論に及ぶ。曰く、「元来吾人がその体軀の作用たる精神を、体外に発出するは如何にしてである(か)、とりもなおさず五官と号する窓を経て発出するではないか。もし目がなければ何によりて色彩に関する影像を得よう、…、皆この窓より惹き入るるのである。吾人もし仮りにりょう然として無一物であらう、海に浮かぶ海月といっぱんだらう、何の先天的の意象もあるべき道理はない」と論じて、プラトンの名を挙げて批判している。

結論的に、「以上論ずるところによれば、意象の系図知るべきである。実物に関するものは無論のこと、即ち無形で殊に実物とは何の交渉もなきかのごとく思われるものでも、その始めは必ず五官の窓から吾人の精神を誘発し感興し来るところの外物が、先づこれが模型となり、牽連^{けんれん}し、変化し、^{いんうん} 網蘊^{かじゆん}し、化醇して影象となり、記性中で若干時月を経る中に、また変じて純然抽象的となりてここにもって意象を作成するのである。しかれば意象の作成には記性最も与^{あずか}りて力ありといはねばならぬ」と述べる。ほかのところにカントの名をあげているから、これはカントの認識論について兆民の理解を述べたものと言うことができる。「記性」ということばはカントの言う「理性」に当たるだろう。どんなテキストで読んだか分からないが、中江兆民がカントを学んだことは確実である。

F：おしまいの方の「断行、行為の理由、意志の自由」という項は、兆民のカントについての学習が『実践理性批判』にまで及んでいたことも明らかにしている。果敢に実践した人は、「吾人の目的を択ぶにおいて果して意志の自由ありとすれば、そは何事を為すにも自由なりと言ふのではなく、平生習ひ来ったものに決するの自由があるといふに過ぎないのである」と、よくわきまえて覚悟していたと判る。

G：「自省の能」の項が、兆民がよく反省する人だったことも明らかにする。曰く、「吾人はただこの自省の能があるので、およそ己れが為したる事の正か不正かをみな自知するのである。故に正ならば自ら誇りて心に愉快を感じ、不正ならば自ら悔恨するのである。この点からいへば、道徳といはず、法律といはず、およそ吾人の行為は、いまだ他人に知られざる前に吾人自らこれが判断を下して、これは道徳に反する、これは法律に背くと判断するのである。故に道徳は正不正の意象とこの自知の能とを基址として建立されたるものである」と。

『一年有半』は余命「一年半」と告げられてからそれほどの月日をかけずに書かれたのだが、続編の『続一年有半』は病状がさらに悪化したなかで書かれた。短いが力をふりしぼって著した二つの著書の毅然とした記述に、わたしは感嘆する。『続一年有半』末尾の「結論」が、「組織的に一書を編めるのは、著者今日の境遇の容るさざるところである、故に

首章よりすなわち乱雑を極めておる」と無念を吐露している。

書物を開いて点検することはほとんどできなかつただろう。この著書に現われている深い内容からして、哲学を学んでそれを無理なく自己のことばで表現できるほど血肉化していた、ということができる。実践家のなかで明治前半にこれほど深く哲学理論を把握していた人は数少なかったのではないだろうか。ヨーロッパの書物が多くなった今日の状況下でも、昔にくらべてむしろ表層しか受け取っていない人が多いかもしれない、朱子学的な文章を耳にすることが希になって、漢字に表わされた重要概念の理解力も落ちているだろうから。門外で教えを聞いたことしかない老いた小僧はそんなことまで危惧している。

2024 年 10 月寒露

海蝶 谷川修